

# 古文書倶楽部

【発行】  
秋田県公文書館  
2008.10  
第25号

公文書館講座の御案内です。古文書解読コースは十一月十一日(火)「伊頭園茶話が綴る近世秋田の暮らし」(渡部紘一)。アーカイブズコースは十一月七日(金)「公文書から見る秋田のちよつといひ話」(戸嶋明)。お申し込み受付中。

## 梅津憲忠の肖像と甲冑

秋田県公文書館では、企画展「武士の日記を読む」後期展示を十月二十四日(金)から十一月二十日(木)まで開催します。(午前十時～午後五時。二階特別展示室)  
ここでは展示品「梅津憲忠肖像」に描かれた甲冑と陣羽織が秋田市立佐竹史料館に展示されている、という話を紹介します。



梅津憲忠肖像(秋田県公文書館所蔵 吉田77)



黄唐織牡丹唐草地紋陣羽織



梅津憲忠所用甲冑

梅津憲忠(一五七二～一六三〇)は、初代秋田藩主佐竹義宣のもとで家老として藩政全般を担当した人物です。「政景日記」を残したことで知られる梅津政景の九歳年上の実兄にあたります。

憲忠は、元龜三年(一五七二)に下野国宇都宮に生まれ、父と共に常陸国太田に移住した後、佐竹義宣の近侍として仕えます。慶長七年(一六〇二)義宣が秋田に遷封となると、憲忠はこれに従い、渋江政光や向宣政などと共に藩政の中樞を担います。

また慶長十九年(一六一四)には義宣に従い大坂に出陣し、大坂冬の陣最大の激戦と言われる今福の戦いに参戦します。憲忠は深手の槍傷を負いながらも勇猛に戦い、その姿から「佐竹家の黄鬼」と称され、後に將軍徳川秀忠から感状と太刀を賞賜されました。

さて肖像に描かれた憲忠を見てみましょう。憲忠は満月をかたどった前立の甲、牡丹の紋様を織り込んだ黄色の陣羽織を身につけています。実はこれと同じ特徴を持つ甲冑と陣羽織が、秋田市立佐竹史料館に所蔵されています。そして、この甲冑と陣羽織には大坂冬の陣で憲忠が着用したものであるとの説明が、延宝五年(一六七七)に憲忠の孫にあたる梅津忠宴によって書き込まれています。

つまりこの肖像は、実際に身につけたとされる甲冑や陣羽織を忠実に描き、大坂冬の陣で活躍した際の憲忠の姿を表したものと考えられます。今回、当館で肖像を展示している期間中、佐竹史料館の常設展示「武器と甲冑展」においても、この甲冑と陣羽織が公開されています。(十二月七日まで)

梅津憲忠の勇姿を伝える貴重な資料が、両館で同時期に展示される貴重な機会です。ぜひとも両方の展示に足を運んでいただき、秋田藩の礎を築いた人物を身近に感じていただきたいと思います。(加藤昌宏)

# 人議公藩田秋食べる鰻

武士の日記を読んでみる

初岡綱正日記

混架25 125 1~7

「うなぎ」と言えば産地偽装問題が強烈に頭に浮かぶ今日ですが、この話は明治維新期のものです。

明治二年(一八六九)三月七日、明治政府は議事機関である公議所を開設し、各藩から執政クラスの士族一名を公議人として集めました。公議所では、切腹禁止や廃刀、穢多非人の廃止など開明的な議案が多く出されましたが、独自の発言力を持ち始めたことに危機感を抱いた政府は公議所の権限を縮小し、同年七月に集議院と改称し廃止の方向へ持って行きます。

この公議所に秋田藩代表として参加したのが初岡敬治綱正(一八二九~一八七一)です。初岡は藩校明徳館の教授を勤めた人物で、明治元年の戊辰戦争時には京都へ行き、秋田への援軍を新政府の幹部に説いて廻った経歴を持っています。初岡敬治が公議人として選ばれたのは、中央情勢に疎い秋田藩の家老よりもふさわしいと判断されたためです。もっとも初岡は地位が低かったため、公儀人代としての立場でした。

東京での初岡の仕事は、もっぱら戊辰戦争で奥羽列藩同盟に与して新政府軍と戦った奥羽諸藩の新政府への取りなしでした。

しかし、当時の政府は薩摩・長州・土佐・肥前藩出身者の発言力が強く、これに反発した初岡は次第に反政府派の人物とみなされ、明治四年に捕らえられ獄死します。

こうした人生をたどった初岡敬治の日記を見ると、彼の激烈な人間模様とは異なる、ほえましい一面を見ることが出来ます。

実は初岡、鰻が好物で、取り憑かれたように鰻ばかり食べているのです。例えば、明治二年正月元日条には次のようにあります。

和泉橋通り春木やにて、うなぎ給候申し合いのところ、今日八拵えざる由に付、日暮方帰宅致候

「一年の計は元旦にあり」という諺がありますが、初岡は元旦から鰻を食べようと、その望みが叶わなかったことがわかります。

しかし三日後の一月四日条には  
近辺買もの致し、うなぎやにて朝飯給候  
と朝食に鰻を食べた話が出てきます。

同月二十九日条にも「四ツ過よりあけほのへ参候、九ツ過運吉参、井上遅刻二付うなぎめし給候」と鰻を食べた話が出てきます。

更に二月五日条にも「春木やに参、忠治と兩人うなぎにて支度候、七ツ頃也」と二人で鰻を食べた話が出てきます。

三月十三日条には「晩、健蔵え参咄居候、同人え、うなぎ百疋価遣候」と鰻百疋分(銭

一貫文)の金を払った話があります。

きわめつけは六月四日条の「うなぎ保養喰二買候故」と、いかにも健康維持のためうなぎを食べると理屈をつけているところです。しかし、ここまで日記に鰻を食べる話が出ているのを見ると、健康維持というよりも、完全に「江戸前の鰻」の虜になっていたと考えるのが妥当でしょう。

武士の日記は味わい深い世界です。公文書館企画展「武士の日記を読む」を十分にお楽しみください。(加藤民夫)

## 公文書館企画展

### 武士の日記を読む

後期展示

十月二十四日(金)~十一月二十日(木)  
午前十時~午後五時。二階特別展示室。

